

みんなの  **びわこセツルの家**

Since

1969 → ミライへ



田舎をもたない子どもたちに 自然に触れる体験をさせたい。

セツルの家が出来るまで

セツルの家は滋賀県大津市にある子どもたちの為の宿泊施設です。

大地協の間では「当たり前」にある施設ですが、どのような経緯で出来たかご存じでしょうか？

最初のきっかけは個人的なもので、某保育園園長の小学1年生の息子さんが手術を行いました。退院後の療養中に、暑い時期の為涼しい所で療養してはどうかと、育徳園の竹垣先生に声をかけていただき夏に空き家となっている民家を利用したのが始まりです。

個人的な利用だけでなく、都会の子ども達にもこの自然体験を。という思いから、竹垣先生と共に当時のセツルメント研究協議会（現大地協）の今川学園、三木先生や役員の方に相談しました。

当時のセツルの家は現在のように引率して集団で宿泊するというよりは、施設関係者や家族の利用が多く、都会の中で子ども達を育てることに課題があり、「自然に触れる事の大切さ」という事が考えられていた。都会の中では見つからない宝物を遊びながら見つける。

そんな考えのもと利用開始から3年目頃に育徳園、倉光先生の弟さん、長居保育園、宮川先生の息子さんが夏の期間の管理人をしてくれ、びわ湖に「セツルの家」が出来ました。

自然の中にはいっぱい
の宝物が埋まっている。それを自然の中で
ずっと遊んで見つける。

セツルの家危機一髪！！

ある日、セツルの家の家主さんがセツルの土地、建物すべてを急遽売りに出される事に…

当時セツルの家をお借りしての利用でしたので、荷物を全て片づける事に。38年の歴史に幕が落ちる。

片付けに向かう大阪から滋賀までの道のりは大雨。作業に向かう人たちの心にも雨が降っていました。

しかし、セツルの家に到着すると、奇跡のような快晴に！！最後の閉鎖作業を誰かが見守ってくれているような空でした。昔からあった飛び込み台も目の前で解体され…全ての物もなくなり…

ついにセツルの家の歴史38年間に幕が下りる。

…が！？…その半年後奇跡が起きました！！

存続のために物心両面で某法人が奔走し、その後他の法人や数百人の人たちからのカンパがよせられました。

多額の寄付もあり琵琶湖のセツルの家は今までの夏季限定の借家から年間自由に使える、大地協の家となりました。

危機を免れるどころか、奇跡の復活です。

様々な人との繋がりから生まれたセツルの家は、様々な人との支え合いで今日まで続いてきました。

大地協が信念とするセツルメントの精神がセツルの家の歴史からも感じ取れるのではないのでしょうか。

子どもにとっての自然の大切さとは

100年以上も前、石井十次は一人の子どもを預かったのをきっかけに生涯、約3千人もの孤児を育てました。

十次は貧困にあえぐ子どもたちを飢えから救っただけでなく、それらの子どもの将来を考え、一人ひとりが学問と職業を身につけることを目標にしました。その教育の基本は郷里宮崎県の茶臼原で実践した荒地の開墾という自然主義でした。

石井十次の精神を理念とする愛染園隣保館の保育所、児童館は年間行事や日常のプログラムの中にその自然を積極的に位置づけ、具体的な取り組みを続けています。

今年の夏もそれぞれの施設が都会の中では味わうことが出来ない自然体験を精一杯実践してきました。自然が子どもたちにとって、いや子どもだけでなく私たち大人一人ひとりにとっても限らない成長と自己実現に不可欠なものであることを再確認しながら、びわこや奈良県東吉野村のキャンプに参加しました。(以下省略)

この夏のキャンプはたくさんの障がい児が参加しました。自然の中で彼らはとても輝いて見えました。日常の保育では私たちの力不足のせいか、様々なところで差が見受けられる障がい児ですが、自然の中ではそれはあまり感じられませんでした。

自然はすべてに対して平等だからでしょうか。自然は一人ひとりをありのまま受け入れてくれるからでしょうか。石井十次は最初の茶臼原開拓のメンバーに障がい児を選んだといいます。十次の自然主義の奥深さと自然の偉大さを改めて感じます。

小掠 昭

《小掠昭先生 追悼記念号より》

『自然体験施設の子どもたちへの必要性とは』

- | | |
|---------------------------------|---------|
| 1 与えられたものではなく、自分たちで創る自然体験施設を | 《自主・創造》 |
| 2 自然を体験し、愛し、環境を考え、守る自然体験施設を | 《自然・環境》 |
| 3 手間、ひまをかけ、生きる力が育つ自然体験施設を | 《自立・体験》 |
| 4 仲間づくり、そして自分づくりができる自然体験施設を | 《自分・仲間》 |
| 5 自由さと人間のふるさと感じさせてくれるそんな自然体験施設を | 《自由・共生》 |



こどもたちの声

～ セツルの家の思い出 ～

小学1年生

びわこキャンプ、おもしろかったです。よるのきもだめし、こわかったです。ねるときゆめをみそうだからこわかったです。つぎのあさへびがいて、ぼうでつつくとかえるがきて、かえるはたべられそうでかわいそうでした。びわこでおよぐと、もがひつつくからきもちわるかったです。およぐとじょうずになるしきもちいいです。らいねんも、そのつぎのとしもびわこキャンプに行きたいです。

小学2年生

びわこに、いったよ。かえるも、いたよ。虫とりもして、とてもたのしかったよ。ひるねのとき、しずかにすると、なみの音が「ザブーン、ザブーン」ときこえて、とてもすずしかったよ。みんなで、たのしくおよいだよ。カレーもそうめんも、おいしかったよ。こんど、また、セツルのいえに、とまりたいなあ。

学童OB

バスから降りて、細くてまわりに草のしげったみちを、歩いて、出たところがセツルの家の前でした。(こんなところに家があるんかあ)と不思議に思ったものでした。部屋にはいって見ると、畳のひいてあるきれいな広い部屋でした。むかいに湖のあるこの部屋に入ると、急に父と母がなつかしくなりました。でも、友達と遊んでいるうちに、そんな、さみしい思いは、ふっとびました。また、水遊びをしているうちに、ずっとここにいたくなっていました。セツルの家ではめずらしいものを二つ見つけました。便所とお風呂です。便所はポットン便所で(こんな所で、もし落ちたらくさいやろな)とおもいました。お風呂は、五右衛門風呂で丸いお風呂でした。また、板をふんどかないといけないので(しんどいお風呂やなあ)とおもいました。そして、キャンプ。この時また、父や母がなつかしく思えてきました。キャンプファイヤーの赤く明るい火に照らされながら思わず涙が出そうになりました。二日目、家へ帰る時です。いざ、帰るとなると、なんだかさみしくなってきました。なにもいわずに帰った僕を許して下さい。今あらためて、セツルの家ありがとうございました。



おとなたちの声

～ セツルの家の思い出 ～

保護者の声

待ちに待った親子キャンプ。子どもたちの付き添いとはいえ、自然に親しむ機会というのは幾つになっても心がわくわくとするもので、少々騒々しいのをがまんすれば、嫁ハンや自分の子から解放されて楽しいものである。山小屋風のシャレた建物と想像していたのに、古くさい農家兼漁師家ではないか、えらいところへ来たもんだ。しかし、子どもらの活発な動きが始まるや、そんな勝手な思いは吹っ飛んでしまう。ウン！ここは良い所だ。

指導員の声

びわ湖での朝はすばらしい朝である。水平線に太陽がさんさんと顔を出し始めるその頃には漁師さんはポンポン船で魚をとっている。砂浜近くでは投げ網をしてバケツに魚がうようよ入っている。波は静かに“チャプンチャプン”とするが、すがすがしい音色をさせるその脇を歩いて朝の散歩、なにもかも忘れ爽やかな透き通った心になります。都会では味わえないものであり本当にすばらしいびわ湖セツルの家です。

保育士の声（記念誌発行当時、保母と記してあります。）

私の保育園は、0歳から3歳までの全園児45名という家庭的な園です。当園では、3歳児だけ「セツルの家・お泊り保育」を3年前から行っています。えっ！3歳児が…と思われるかもしれませんが、都会では見られない、田や畑、山や川そして湖…そんな自然に囲まれたセツルの家は、子どもたちの淋しさや不安も忘れさせてくれました。ちょっぴり冷めたかったけど、広い琵琶湖で思い切り手足を伸ばし、浮き輪につかまり泳いでいた顔。キャンプファイヤーでは、小さい手でろうそく持って、炎をみつめていた顔。山にむかってみんなで「ヤッホー」とこだまして返ってきたときの顔。すがすがしい空気を吸って、朝のお散歩の途中で畑の片隅の小さいかわいい花をみつけて持ってきてくれたときの顔。

今思い出しても「どの顔も生き生きかがやいていたな」と思います。



セツルの家を愛した先人の方々

愛染橋隣保館 菅 良介（～2004）

育徳園 竹垣 幸子（～2018）

長居保育園 宮川 ヒサ

今川学園 池田 正子（～1999）

風の子保育園 松村 寛

平和の子保育園 松野 五郎

北田辺保育園 戸田 円八郎（～2007）

長居保育園 宮川 長生

わかくさ保育園 小掠 昭（～2011）

今川学園 小田垣 富夫

育徳園保育所 倉光 慎二

今池こどもの家 小谷 啓二

私とたちとセツルの家

～ セツルの家の思い出を振り返って～

様々な多くの人たちの苦勞の中でできあがってきたセツルの家。すぐ前に琵琶湖、後ろに比良山系、と恵まれた自然の環境。その中で生活は、そこを利用した子どもたちだけでなく、職員、ボランティア、保護者に対しても、数多くの経験を与えてきました。ホテル、湖、魚、ヘビ、カエル、キャンプファイヤーの炎、満天の星、一緒に作った食事、五右衛門風呂いつまでも新鮮に残り続けています。

《地域福祉の諸問題・セツルの家15周年記念誌》より

『五右衛門風呂のエピソード』

菅先生 「思い出と言えば、ポンプが思い出である。一日の労働として朝から晩まで井戸の水を汲みあげていた。外のポンプでなく家の中にあるポンプです。それから風呂がなくなって、風呂が欲しいと言われた時は、琵琶湖まで来て何でかなあと思っていましたが、出来てみれば良かった」

竹垣先生 「しかし、五右衛門風呂という発想がよかった」

宮川先生 「五右衛門風呂は最初からあるものと思っていました」

菅先生 「風呂は途中からです。最初はマキで、そしてバーナーに変わった」

竹垣先生 「風呂のない時は、風呂を借りに行きました。丁度高架の下のところですよ」

松村先生 「マキで焚くと体がまたドロドロになり、寝ることもできず行水することになった」

菅先生 「今度はポンプから水道になり、かまどがなくなりプロパンに変わった」

《15周年に寄せて座談会より》

倉光先生 「小学生の頃だったかな。江若鉄道の青柳ヶ浜駅があって、裸電球が1個ついていた。その電球の下に行ったら必ずカブト、クワガタがいる。みかんの缶詰の空き缶を持って行って採った。別荘の浜の家に行って、昆虫採集のセットで注射。それが夏休みの宿題でした。その当時の青柳浜はかなりの繁華街やったな。まあ、独特の郷愁を誘う環境がありました」

竹垣先生 「やはり空も違うし風も違う。子どもたちの昆虫採集の思いを何とか叶えてやりたいというのがまずありました。都会では植物採集もできない。まだ当時はセツルの家の周りは草もいっぱい、いろんなのが生えていたので植物採集もできた」

松野先生 「子どもたちには田舎がないから、都会の子、施設の子にとっては本当の田舎だったと思いますね。自然の中にはいっぱい宝物が埋まっている。それを見つけるというか。一つはカブトムシであり蛭であると思うんですが、もっといっぱいあると思うんです。魚にしても…」

《50周年記念誌より》

私とセツルの家

～ セツルの家の歴史を振り返って ～

私がセツルの家に行くようになったのは、セツルの家の開設当時（1969年）まもなくの頃からなので、もう50年以上になります。

当時は、江若鉄道の青柳浜駅があり裸電球が一個付いていた電信柱があるだけでした。満員電車の中でしたがみついてリュックを背負って乗って行きました。

夜は真っ暗で、裸電球に沢山のカブトムシが集まってきたのを覚えています。この頃は、まったく見られなくなった「ホタル」も大きな木に無数に光って、まるで夜空に輝くクリスマスツリーのようでした。今ではカブトムシは少なくなり、ホタルはまったく見られなくなったことはとても残念です。

台所では、井戸水をポンプで汲み上げ、おくどさん（かまど・へっついさん）があり、煙がまん延する中でご飯を炊きました。

部屋中に煙が広がり子どもたちに「早く浜へ出なさい」と、言ったものです。子どもたちは「わー煙いよー」と喜んで浜に逃げていました。五右衛門風呂の浮き板が浮き上がってきたり、窯に体が触れて熱かったりしたこともありました。

牛小屋があって、搾りたての牛乳を飲ませてもらうこともありました。祖母が、朝早くの浜辺で投網の漁をしている漁師さんから魚を分けてもらい調理して食べさせてもらいました。

夜は満点の星が見えて、天の川に夏の大三角形がはっきり見えて織姫彦星の七夕の話真剣に聞く子どもたちの姿がありました。

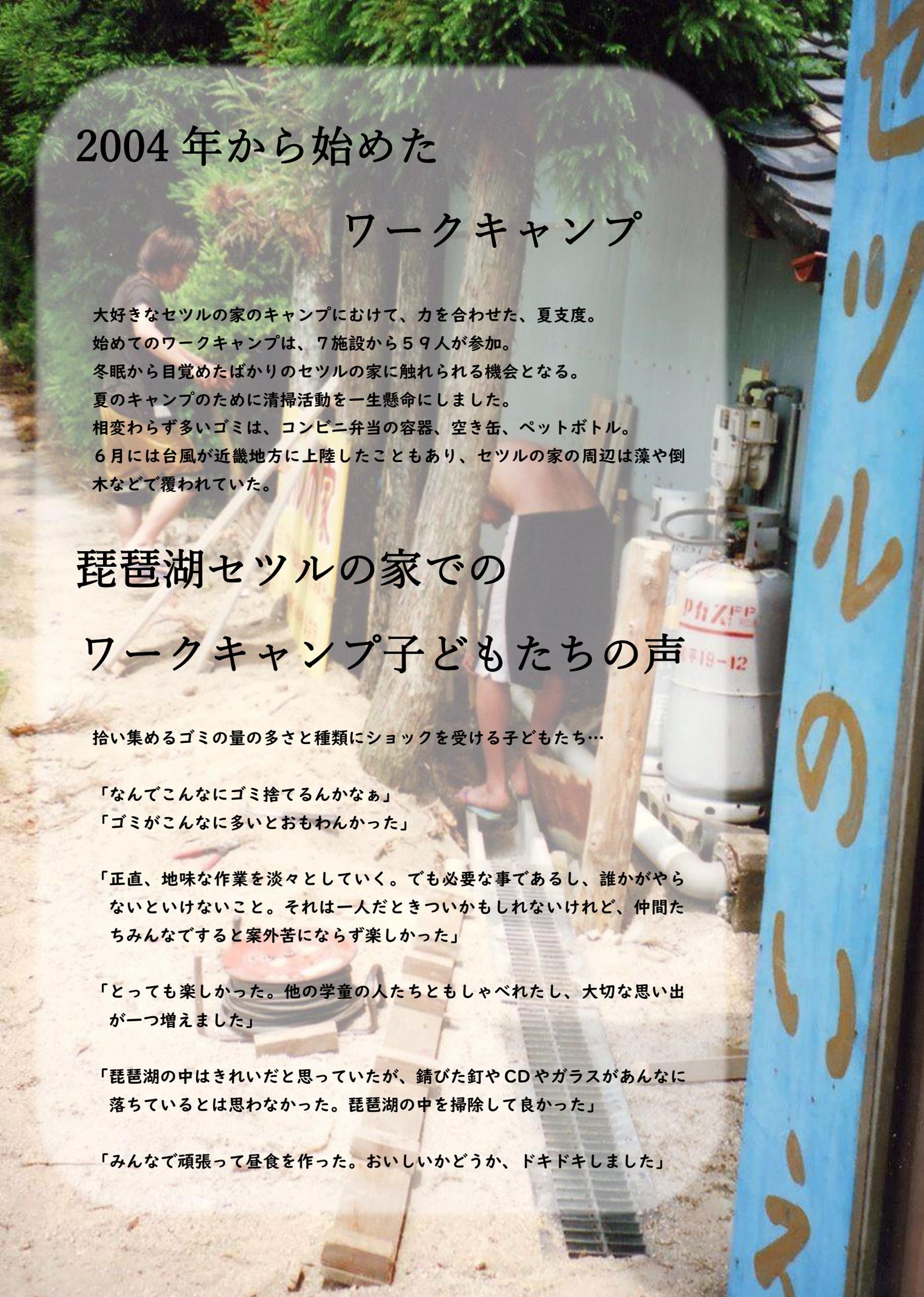
また、満月の夜には、湖の水面にキラキラ映る月の道を見て感動を覚え、時間によって月の色が変わることも知ることができました。

決して大阪では見ることの出来ない光景をセツルの家では手が届きそうなところで見る事が出来て、自然の中に包み込まれている心地よさを感じることができました。

夏の始まりの開設準備では、トラックを借りて前日に「北市民館」に預かってもらっていた布団を引き取りに行き運びました。上げていた畳を敷き、家も周りの草を引き、障子の扉を琵琶湖で洗い障子を貼って、布団にシーツを掛け、ミシンを持ち込み枕カバーを縫うこともありました。飛び込み台も湖に設置し、ブイを張り遊泳場を整備しました。

現在は、井戸水のポンプが水道になり、かまどがプロパンガスになり、トイレもボタン便所から簡易水洗トイレになり、シャワー室が増えて設備もどんどん良くなり変わりました。

周りの環境は目まぐるしく変わりましたが、施設長も職員もボランティアも OB もみんなが一丸になって夏のキャンプのセツルの家で子どもたちが楽しく過ごせるように願い、自分自身も楽しんで働いてくれる姿、ボランティア精神が受け継がれていると思います。



2004年から始めた

ワークキャンプ

大好きなセツルの家のキャンプにむけて、力を合わせた、夏支度。

初めてのワークキャンプは、7施設から59人が参加。

冬眠から目覚めたばかりのセツルの家に触れられる機会となる。

夏のキャンプのために清掃活動を一生懸命にしました。

相変わらず多いゴミは、コンビニ弁当の容器、空き缶、ペットボトル。

6月には台風が近畿地方に上陸したこともあり、セツルの家の周辺は藻や倒木などで覆われていた。

琵琶湖セツルの家での

ワークキャンプ子どもたちの声

拾い集めるゴミの量の多さと種類にショックを受ける子どもたち…

「なんでこんなにゴミ捨てるのかなあ」

「ゴミがこんなに多いとおもわなかった」

「正直、地味な作業を淡々としていく。でも必要な事であるし、誰かがやらないといけないこと。それは一人だときついかもしれないけれど、仲間たちみんなですると案外苦にならず楽しかった」

「とっても楽しかった。他の学童の人たちともしゃべれたし、大切な思い出が一つ増えました」

「琵琶湖の中はきれいだと思っていたが、錆びた釘やCDやガラスがあんなに落ちているとは思わなかった。琵琶湖の中を掃除して良かった」

「みんなで頑張って昼食を作った。おいしいかどうか、ドキドキしました」

自然体験応援バザー

バザーが始まったのは2001年1月、愛染橋保育園で「山の家を創ろうバザー」でした。この年は2月にも長居保育園で2回目が行われました。

それから20年の間毎年、大地協加盟の施設の持ち回りで21回のバザーが開催される。残念ながら、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、22回目の開催は見送られている。

21世紀を担っていく子どもたちが自然生活を十分に体験（自然の恵みの大切さを実体験）し、その中で仲間と関わり、仲間とともに遊び、共生していくことのできるようにと力を合わせました。

《 大地協の理念とレゾンドートル（存在理由）と大地協バザー開催テーマ 》

『 自然・エコ（ECO） 』 未来の子どもたちのために、かけがえのない自然を見つめなおす。

『 地域 』 地域文化や資源を理解し、住民のエネルギーを活用する。

『 人 』 人と人のつながり、参加する一人一人が主役となる。

『 力 』 だれもが持っているエンパワメントの発掘と活用を行う。



大地協バザーを通して、たくさんのお金が集まりました。

でも、それ以上に**たくさんの仲間**が集まりました。たくさんの**気持ち**が届きました。

《 50周年記念誌より 》

大地協

自然体験応援バザーなので、「もっと自然を大切にしよう」とプラスチックゴミを減らす取り組みやマイ箸の使用、寄付された物品などを次の開催まで各施設での保管などをすることを大切にしてきた。

中、高生の活躍できる場をつくる。自分たちで出店運営する店「ギャルメイク」「かえっこバザール」「山の家東吉野物産販売」「けん玉教えます」「工作、手作りコーナー」「大地協チラシ配布」「自転車整理」「ゴミ拾い」などの活躍があった。

人と人がつながれば、バザーの売り上げにもつながるのではないかと考える。

20年の間には社会構造も変化し寄付された物品がなかなか売れないことや施設からの出店が減ったりすることがありました。

しかし、変わらないのは「子どもたちのために」の思いから、施設長、職員、ボランティア、中高生、保護者などあらゆる人たちが一緒になって、それぞれの参加や関わり方は違いますが、「楽しかった、おもしろかった、大変やったけど良かった」と思えたのではないのでしょうか。

これは、セツルメントの精神につながっていると思います。これからの人と人のつながり「共にあゆむ」におかって一歩ふみだすためのエネルギーとなっていくと思います。



ミライへ

私たちの セツルメント活動

多くの人に、仲間に支えられて「琵琶湖セツルの家」があります。多くの想いが集まって成り立っている場所です。

開設当時の先人の方々、施設長、施設職員、子どもたち、OB、OG、保護者、ボランティア、地元地域の方々など、それぞれの立場や行動は違っても暖かく支えてくれています。

子どもたちは、山や川、湖や木々、虫や動物に憧れをもっています。子どもたちの健全育成には、自然に触れることが必要です。自然体験です。

子どもたちは、様々なことを経験して学んでいきます。大阪では味わうことができない生活体験です。

琵琶湖セツルの家は、大きくなってからも懐かしさと、人と人のつながり、触れ合いを求めてやってくる場所です。子どもたちの心のふるさとしての活動の場所です。

人間が人間らしく生きていくために「自然」は欠かすことはできないもので、自然は感性を育て、感性は人間性を育みます。そして、セツルメントは人間性の追求です。これは小掠先生が話してくださった言葉です。

この言葉の理解を深め、「今」私たちが考え、何ができるでしょうか。

「子どもたちに自然体験を」という想いをもつ人たちはたくさんいます。その人たちの想いを集めて、それを実現していく使命があると思います。参加し、共に分かち合い、みんなで支え合う。

自然の中に自分たちが生かされていることを実感する。自然を愛し、守っていく働きが大切だと思います。

琵琶湖セツルの家が子どもたちとともに、永遠に続きますように…。

